

80

福島令子（福島智・東大教授の母）が考案した 盲ろう（聾）者のための指点字

飯塚 修三

いづか眼科（西宮市）

盲ろう者は視覚障害と聴覚障害の二重苦を持った障害者である。全国の「推計盲ろう者数」は約22,000人と考えられている。社会福祉法人・全国盲ろう者協会に登録している1級から6級までの「登録者数」は650人で、そのうちの1,2級の「重症登録者数」は127人である。弱視、難聴などの軽度の盲ろう者にとっては意思伝達手段が困難だが可能ではある。しかし、完全失明・完全聾の障害者にとっては、従来は「指文字」、「接触手話」、「手書き文字」、「プリスタ（ドイツ製速記用点字タイプライター）」などしかなかった。

1981年、福島智の母、令子が考案した「指点字」は伝達手段として高速かつ正確で、盲ろう者にとって活動の機会を広めることになった。

1962年、福島智は男兄弟の第三子として生まれた（母、令子：29歳）

1966年、右眼に緑内障が見つかり、治療するも失明。翌年、眼球摘出。

1971年、左視力低下（虹彩炎か続発緑内障か、原因不詳）。翌年、左眼も失明して全盲となった。

1973年、兵庫県立盲学校小学部に入学。

1977年、右耳の聴力が急激に悪化して、右聴力を失う。

1979年、筑波大学附属盲学校に入学。

1980年12月、左耳の視力も急速に落ち、自宅療養。

1981年1月、「男版ヘレン・ケラーになりそうや」と盲学校の恩師に嘆く。この頃には全盲、全聾状態になる。

1981年3月上旬、母が指点字を考案し、使用した。その時の様子を母の手記より引用する。

【光りを奪われ、その上、音も奪われる。そんな自分には何かの使命があるのかもしれない。そう思いつつ、智の心は揺れた。救ったのは、母が偶然思いついた「指点字」であった。あの日、神戸のつましい市営住宅の台所で、智はいらだっていた。通院するのに、付き添う母の支度ができていない。「何時やと思ってんねん。何をモタモタしてんねん」。まくしたてる息子に、たまりかねた令子は、ふと思った。これわかるやろか。点字は六つの点の組み合わせで音などを表す。点字のタイプライターは、両手の人指し指、中指、薬指の六本を使って打つ、それと同じように息子の指先に打ってみた。「さとしわかるか」。息子は、にっと笑って言った。「わかるでえ」。通じた！ 母は、もううれしくて、天にも昇る心地。（中略）のちの福島、そして盲ろう者の重要な生命線のひとつとなる「指点字」は、生ゴミのすぐそば、神戸の台所で母と子によって生まれた。】（生井久美子「ゆびさきの宇宙」岩波書店、2009年より抜粋）

「指点字」を文章で説明することは困難である。イラストを挿入した投稿文は本部より、イラストは掲載出来ないで文章にするよう書き直しを命じられた。「指文字」は盲ろう者の指に健常者がタッチによる触覚刺激をモールス信号で伝える方法である。基本的な方法は盲ろう者と平行に健常者が座り盲ろう者の指に健常者が上から指をタッチしてゆく。点字は6つの点から出来ていて、左手の3指、右手の3指を使用する。①の点（左・人指し指）、②の点（左・中指）、③の点（左・薬指）、④の点（右・人指し指）、⑤の点（右・中指）、⑥の点（右・薬指）。例えば、「あ」を表す時、①の点を健常者が盲ろう者に（左・人指し指）をタッチし、他の指は触らない。このようにしてモールス信号として文字を伝える。現在、福島智は東京大学先端科学技術センター教授としてバリアフリーの社会実現のため努力している。（文中敬称略）